

歌川国芳

Utagawa Kuniyoshi

太平記英勇傳

Heroes of the Great Peace



VOL.
1

太平記英勇傳

Heroes of the Great Peace



Copyright © De Anima Books 2013
All Rights Reserved

This edition is a compilation of Japanese woodblock prints by Utagawa Kuniyoshi, reproduced from the followed original set: *Taiheiki Eiyuden* or "Heroes of the Great Peace" (1846-47).

Utagawa Kuniyoshi was a major master of the 'floating world', or Ukiyo-e school of Japanese art, and, together with Katsushika Hokusai (1760-1849), Utagawa Hiroshige (1797-1858) and Utagawa Kunisada (1786-1864), dominated nineteenth century printmaking in Japan. Prolific and multitalented, Kuniyoshi considerably expanded the existing repertoire of the school, particularly with thousands of designs that brought vividly to life famous military exploits in Japan and China. Kuniyoshi developed an extraordinarily powerful and imaginative style in his prints, often spreading a scene dynamically across all three sheets of the traditional triptych format and linking the composition with one bold unifying element - a major artistic innovation.



The *Taiheiki* was written in the late fourteenth century and recounts a series of wars between the Northern Court of Ashikaga Takauji in Kyoto, and the Southern Court of Emperor Go-Daigo in Yoshino. However, this series of prints portrays characters from the civil wars of the sixteenth century, with the participant's names altered. Most of the prints bear numbers within circles. They are each about 14 by 10 inches (36 by 25 centimeters), a size known as *ohban*. Complete translations of the texts on the prints may be found in *Heroes of the Grand Pacification: Kuniyoshi's Taiheiki Eiyuden* by Elena Varshavskaya (2006, Hotei Publishing, Amsterdam, 2006).

合郷基左門

久盈

大多家の臣として
知葉田辰家を旗下
の将となり賤ヶ峰の
急戦お宅同盛益
が軍勢を引揚させ
んと波良彦次郎と
諸共お踏止て殿
かり目お余
上方勢の鋪
浪打て追来
と支戦お其
有様万夫も
更に敵まうへに
りふ雄一上方勢只人
の久盈が為に進無て見と
うらふ吹鳴石松正則斯
ととく恰御々の怒とに鎧
閃て突うら基左門見返
やうき小冠者の振舞うらと同鎧
かゝと合せ互ふ竜虎の勢とを時移と
挑み合郷今朝う数刻の戦お旁果
鎧法漸お乱るや石松いらのて操出せ

太平記英勇傳



一家畧傳史
柳下亭種員記

皇
炎

一
國
之
方
画

合郷基左門久盈
(Aigo Gozaemon Hisamitsu)

太平記英勇傳

明石理太夫秀基

登喜の家臣精忠無双の士なり登喜四條の二戰
勝利の後中国より引返り敵將を討つるに
四王連左司尉明石理太夫の兩人が命に選兵
曾て七十余人農人の形なれども冠を著
西宮の邊に埋伏し敵將の天の助る
高運ありて危き處に連れり四王連
を初め一騎も残らば討死せしめ
しるるなり明石と號せり死せん
とてしるるなり心の裏に思ひ
たるも今に我れ果なるを敵將
の中国より登りしふと主君
に告る者もほし此由を言ふと
死するも遅きなりと幸
しく敵中を切抜きの城に至り
主の旗は出で五十と物語此
以敵を誘ひて却手敵を討つ
多れと言終て君前へ退き其夜切腹し
照るるなり辞世の和歌一首後首を以て主君に
送り取の敷い入るのものと云ふなり
てはさうなりと云ふの夜に那
あつて武士と失ひて登喜も深く是を惜み跡
念願ふなりとせり

一家略傳史
柳下亭種員記



一勇齋
國丹方画
炎

明石理太夫秀基
(Akashi Ridayu Hidemoto)

太平記英勇傳

尼中鹿之助幸盛

雲州富田城主尼子居門大太吉之臣初
豐次郎後鹿之助と更郎變名組の個々幸盛三月十日信と強勇の敵と討
名と顯入吏より願無郡家無及の勇士品川復之助と討取其武名と近國より是
より彌初月と深信三月十日より前之物とあり帶する陣刀長四尺三寸知勇太
勝曾主家尼子氏郡音成爲不滅亡の後讐り復と計て殘黨を僅先
隱岐國へ渡り僅二百の勢を以て隱岐郡官
一千余を鹿宗の然とて郡家の勢
益盛るれ容易く敵
せん爲ふ上之族孫四郎勝久と伴ひ都々登り
足利殿の勤仕に義昭の御後家の後太田
家に屬久吉中因に伐の勅を敵家と
討此時と自願て先鋒と爲る久吉
其義勇感勝幸盛以下尼子の
回臣とて

播州上月の
城と守りし大程
小郡の大軍三万
余

壽の奇

如く件城と重北重
取置敷く討つと来る鹿之助諸卒に下りて大太吉を投正天絶の放或計出
烈防戦の如くも也郡勢も始攻め後詰兵衆の通と断絶をみるも教目
られ城兵今河津電城の諸卒と助る奇手より使し請大將尼子勝久山中幸盛
其他宗使の面々五人切腹と果つる奇手の首將と感速の圍に退其首級を
本國より雲州月山の幸尼子累代の菩提所へ送厚佛事を行ひたり

一家略傳史

柳下其種員記

灸

三書齋
國書万
國書万

尼中鹿之助幸盛
(Amanaka Shikanosuke Yukimori)

太平記英勇傳

荒儀攝津守村重

攝州伊丹城主たる其先將軍義昭公が随從にて
春永の鋒指せしる義昭公の柔弱たるを以て
うごん。大多の降り春永の面前に出る
及んで村重の曰く。領國攝州の地へ総て
十三郡分國して敵役所々城を構へ
兵士を集むる某の切取の事と
仰付られし身命と抛切鎮ヤ
る。と言上るを春永莞尔
とて答へる。さば坐右と見ると
高杯の饅頭を盛並し。その
腰刀を引抜切先。三ツカワ串貫
いふ。村重我寸志なり。食むを
てて目の上へ差付る。一坐色と失ふ
中に荒儀聊恐る。さる有。こ
みより。大の口と。開き切先貫
饅頭と。只一口食んと。春永大に笑ひ。聞及
汝の大膽我。望せし。望に任せ切取て。攝津守と。と
仰られ。村重面目と施。直打立程。一國と切役。後
再び春永の叛き。竟伊丹の城と責落る。圖に切抜。一命と
遁れ剃髪。一期と送り。とや

一家略傳史 柳下亭種員記



荒儀攝津守村重
(Aragi Settsu-no-Kami Murashige)

太平記英勇傳

阿佐井備前守仲政

備前守仲政、下総守久政の嫡男、文武の名をえ、
 勇將たり。永祿三年の春、佐々木義禎、同義弼の両將、
 大軍を率て阿佐井家と撃つと急なり。時に仲政十六才、
 北近江五郡の軍勢に従へ、湖水の辺に對陣あり。
 只一戦、大勝利と得、竟に江州大半と
 切、麻呂同十二年、大多春永の嫡と
 娶て室となし。縁者の因睦、
 かり、春永越前の国主、
 麻久良義景と誅せん、
 彼國へ軍馬と向ら、
 阿佐井家へ年來、麻久良、
 水魚の交あつ、相互に危
 究と救ん、誓約を、仲政
 忽、大多家と鋒楯、江北坂田
 郡、姉川、麻久良諸共、
 春永と戦、の両家共、敗北あり、
 其後、所々、小春永と合戦ありといへども、
 春永の家運、日々盛なり、頃、戦毎に
 軍利あり、竟に勢、究て本城、江州小谷の
 城、ふいて、父久政と、同自害、と果たりと云へ

一家略傳史
 柊下亭種員記



七

灸

阿左井備前守中政
 (Asai Bizen-no-Kami Nakamasa)

太平記英勇傳

浅久良左門太夫義兼

代々戦前の領主として同國一乗谷小在仕
る此將意浅く士を愛する心薄く春永
是等と窺知不日小戦前攻入て浅久良
家と傾んと計義兼を隣國に
阿佐井家と因てむすむ互に危死
助ん約せし春永高運うる依り
挾討んる春永高運うる依り
鐘崎の急難に遁れ再阿佐井と
攻撃し北近江の柳川に出張る
斯て長政義兼は緩兵と云ふ
庫代浅久良孫三郎とて二万余人
加勢を差越し大多勢と争戦る
せし兩陣竟に切崩れ惣敗軍と
成るる後又義兼自身三万余騎を
引卒に上坂本おとと據阿佐井并敵山の衆徒と
併六万余人の大軍と以て大多と對陣るはともにも勅命に
依り和睦整及方帰陣るは是春永が遠謀にて敵國の諸將と
漸味方小降る勢の微るを見極て大軍を發し義兼が田上山の
本陣と攻撃事急るる木国とて引んとるは宗俊の
一門小変心の者有て本城小入事わす東雲寺とて禪院ふ
竜り生害と遂るる

一家略傳史

柳下亭種員記



一丁半帝
國書方通

八交

浅久良左門太夫義兼
(Asakura Saemon-no-Tayu Yoshikane)

太平記英勇傳

千場田修理進辰家

辰家ハ
清和源氏
斯波尾張守の後
胤之太多春水の妹婿
當家譜代の功臣に之勢有
出者に権六郎と号し若正
より戦場は獨歩と名有
敵の斬事数不知或水瓶を打
碎し味方勇気を増し諸
軍士を奮事なり鬼千場田
揮名なり春永諸州に伏す

其身を北國の藩鎮とせり
数十万石を領し敵將中浦を爲
其計策合期に北庄の城壘一時に陥落
一族を盡し自殺せり

一家略傳史
柳下亭種員記

一
國
兵
萬
馬



炎

千場田修理進辰家
(Chibata Shuri-no-Shin Tatsuie)

太平記英勇傳

遠藤儀右衛門政忠

遠藤政忠、後井家の功臣、智勇全き名士なり。主家爲金の良策と進み、下を長政の久攻、關越を計、支を拒用。改忠家運の傾くを、知潔討死せし、阿根川出陣の以前、朋友が集て名残の酒宴し、惟の斯く合戦の當日、衆と離れ、一人大多家の堅陣、突入縦横無盡、切て廻り、向死を愚敗し、味方竟惣敗軍、多う手勢も残り、討死あり。今いふ、是迄多う何卒、敵陣に突入、大将春永、刺遣て、血を以て面、空頭の髪、乱れ、首いりと提、袖印と裂、袷難く、大物の旗本、終に敵首取て、八御大将の宝檢、備と呼り、多う春永の附近、走來と側あり、建中久作、曲者なりと見て、うれば、實槍の首取、女とん、ひ、神隔て、寄附、兵、叔、事の頭と持、る、首と、其、依ふ、春永、目、く、と、ろ、と、投、つけ、久作と、引、組、と、う、双方、開、ち、勇、士、あ、ち、暫、か、間、合、し、る、遠、藤、ハ、今朝、より、戦、勇、一、人、を、た、れ、竟、建、中、久、作、を、討、取、れ、る、過、情、き、

一家略傳史 柳下亭種員記
武士なり



一勇齋
國士方画

遠藤儀右衛門政忠
(Endo Giemon Masatada)

太平記英勇傳

藤原正清

尾州愛智郡の産
父名五郎助
鍛冶と家の業と
うけ久しき為め
母方の親
戚より正清
幼名虎助十牙
の時濃州洲の侯の榮
至彼將小仕初陣より
毎度の戦功就中戦々峰
北國無双の副勇軍地將監と
組む彼を以禁自とせ其曾壁
と戦戦々四国連一の戦勇全固
現兵衛と討取肥後國一揆と退治
する日九州の背力の聞高き志山陣
と闘戦て此と鎧下
に突伏する高名
故平吉と主君忠力
と賞へて子通目の
旗并に去花書家の
陣幕と賜ふとふ
異國の渡海あり
勇威道に渡動
一両王と生構
遠く元良哈の地
方へ渡入彼方の海
岸より皇國の美容
山と望みよりわう
從の軍子等頼に
古郷と追慕せし



軍民強勇と花飾の
わきと鬼將軍と稱せ
とめ肥州のちて數十
万石の領一居城が
終る本邦將帥許多
の中会種威風凛々
信々々々々の源為朝
と此將の威直義勇の
莫大なる此禁す
一家界傳史
柳下亭種員記

一勇齋
國士方貞

藤原正清
(Fujiwara no Masakiyo)

太平記英勇傳

吹嶋政守

尾州某郷の桶工何某が二十才の頃素直にして
腕力石臼と結着せしに遠くを牽動の
怪力わしと見え言を聞き奇しき母か
をてて臣とみ果て我成り随て軍功諸国
小駭し就中賊々率の大戦北回急攻の勇男
合戦其左門に討取敵味方の眼を驚怖
此他何地の軍も政守先鋒する時を勝す
このやうに数度の大戦に依り莫大の領土を
賜ふ実公武勇の勲世に輝き大勢を重振
夫れこそ政守の名と云ふべし

一家略傳史

柳下亭

種員記



吹嶋政守
(Fukushima Masamori)

太平記英勇傳

濱地將監滿國

一勇齋
國士万画



濱地將監元來知東田辰家の臣勇が無双の勇士なり辰家の
獅子伊賀守辰俊の附へて江州名賀濱に在り辰俊敵へ降に
よめて諸共に上方勢ふかり勝々峰の附城堂の木山の砦を守り
辰家彼が性曾限るも多欲ありと知や
無ての朋友野木忠三郎といへる者と
説客として將監と説竟ふ返忠
とせりせり其妻子名賀濱に
ありと密に奪ふと云ふとせり
露顯る一搦捕て陣門に死利
せり斯く戦々峰合戦の時節
迎來上方勢と討たば死かて
して防くも佐藤虎之助に
由合戦い果しありと云ふ
細打と云ふつゝに双方
無双の力者なり良暫く
標合し岨踏まへて
組合るや遠の
谷間に傳ひ
竟ふ佐藤が
爲ふ陣没
と傳へり
と云ふ

家略傳史
柳下亭種員記

濱地將監滿國
(Hamaji Shogen Mitsukuni)

太平記英勇傳

林丹四郎武俊

左馬助の郎等武勇絶倫の
 其主洛外討死の頃
 左馬助光利共江州安乳
 かかり斯きとて同國
 高木の城入んと行出の
 濱に至り時端々敵行合の
 此所敵討の戦ひはて残兵僅
 十六騎敵の大軍雲霞の如く
 押さへ左馬助が勢を余は
 と取圍ひ時ふ光利の後の方より
 出る兵あり諸軍是を以て年
 三十七身は丈六尺有餘其も烈
 戦ひと見え左右の大袖章摺共
 二三箇を落れ落れ脱大童頬骨
 ありて黒く圓眼大鬚髯逆か
 立登みの且六尺余の野太刀
 と引提左の手ふ乱髪を搔
 上鐘と撞くとき大音おけ呼とて登喜
 臣下の人ら強者ありとて人々去る丹州城の
 人鬼神とて一赤井惡左門と討取人耳と裏
 林丹四郎武俊は我事ありといひて彼野太刀と振を
 敵は多し討取か今は是またとて間近く
 寄敵両人を左右ふりて湖水の中へ飛入て失ふとて世
 なるも討死なり

一家略傳史 柳下亭種員記



一萬方幣
 國十方画

父

林丹四郎武俊

(Hayashi Hanshiro Taketoshi)

太平記英男傳

比田孫兵衛正俊

比田三俊、姓は比田、内宿、新後、
教民、同、附、孫、兵、衛、正、俊、
近、郷、毛、谷、村、の、生、名、と、六、助、と、呼、其、性、孝、
武、藝、好、農、業、の、暇、は、是、等、自、得、の、劍、法、
と、違、同、田、川、郡、彦、山、村、現、新、井、と、
て、大、分、と、得、母、家、の、臣、吉、岡、一、味、齋、妻、女、助、太、
と、討、此、事、久、吉、
の、前、速、一、且、
諸、家、の、衆、
更、事、も、
諸、侯、の、臣、下、
天下、の、
勇、力、の、主、三、
今、と、撰、六、助、
相、接、と、も、彼、勝、人、者、の、主、家、賜、
極、其、頂、朝、鮮、の、役、久、吉、肥、前、名、護、屋、
在、故、彼、所、の、辺、の、衆、所、と、出、來、既、當、日、主、
龍、と、以、次、孫、と、合、合、す、三、五、彼、を、
打、有、三、人、の、り、と、此、番、又、彼、勝、
天下、の、武、家、の、臣、の、農、民、へ、助、友、者、
益、多、き、業、と、思、ふ、久、吉、
に、甚、後、悔、と、う、う、斯、打、勇、の、相、接、
肥、後、國、能、木、城、主、佐、藤、家、
志、村、政、威、と、う、れ、我、師、向、て、
は、在、に、土、儀、進、登、諸、人、堅、
と、吞、で、ん、う、れ、行、司、
龍、花、家、の、臣、同、

田、三、俊、五、左、門、軍、配、扇、
と、引、た、れ、や、と、声、を、
わ、り、合、事、一、時、余、見、
尸、醉、如、六、助、政、威、と、釣、上、て、
土、儀、の、外、持、と、ん、と、う、れ、と、村、大、
と、押、う、れ、其、終、六、助、と、押、伏、と、在、
面、を、声、と、あ、り、時、の、も、正、俊、と、斯、
定、の、と、佐、藤、家、の、臣、と、う、り、比、田、孫、兵、衛、
正、俊、と、更、り、異、國、の、軍、に、夜、敵、を、
比、田、孫、兵、衛、正、俊、と、更、り、異、國、の、軍、に、夜、敵、を、
最、々、惜、き、武、士、と、
一家、略、傳、史、
柳、下、專、種、員、記、

一、
勇、
國、
五、
方、
蓋、



比田孫兵衛正俊
(Hida Magobei Masatoshi)

太平記英勇傳

保里蘭丸永保

蘭丸は太多家の功臣保里三左門吉成三男
うづ生得て智勇人勝無類の美童なり
春永深く愛玉ひ昼夜御側侍候はる高智
道秀響應使はる時主君の意違ふは
扈從の命と打擲玉ふ武功大身の道秀は
面猶豫る中蘭丸衆を抽で鉄扇を擧
高智の頭上と散やあ撃るは烏帽子破頂
うづ血流交駭一是全趣意をあらわし當時
道秀が領する江州志賀郡の永保を三左門が
旧領する蘭丸主君ふも奉じ高智
承引せざるをえざるは此遺恨なり
依君の命募斯はるひひんとされ
道秀の命を旅館の圍時節蘭丸と見ふ道秀は
又自頂の君恩を思ふ力若同房丸と共に類なき血戦を悉陣及る中
蘭丸高智の軍勢門内へ入ると毎度うづ追退け強勇の闘む矢須田
宅兵衛が渡合彼も様うう下なきう落し下祭ううう宅兵衛即智の
強者故蘭丸の鎧を取付鼓起さる西足は難くはれ憐れ竟矢須田為此所命と落し
一家略傳史
柳下亭種員記



保理蘭丸永保
(Hori Ranmaru Nagayasu)

太平記英勇傳

堀本儀太夫高利

佐藤正清の勇臣諸国に戦功最多
就中異国の合戦を味方の軍勢を金山
橋中の両城を在る大軍を取圍れり

難侯の由りて正清の

命を請

長林軍

人共は是を救ん

と彼所に至り韓軍と

散々小切ちは此時儀太夫

流矢のくわ小左の臂を深く

射られし折る長林の此所

み来りしれは小軍人我手と

敵は此矢被捨てられしと

軍人驚き馬より飛下り引ぬき

たれ堀本快然として心持はと

言あは馬乗中敵中へ馳入當手

の大將鄭大任より猛將みりしと

馬より下に切て落し其後首をわたり

たり堀本長林とて小聞より別勇るなり

儀太夫白き鳥毛とて鎧の鞞より軍人へ

黒き鳥毛とて鎧の鞞より成りしれは彼国の

軍卒も白鳥毛黒鳥毛とて面々恐慄たり

一家略傳史

柳下亭種員記

一軍齋
國士方画



五
炎

堀本儀太夫高利

(Horimoto Gidayu Takatoshi)

太平記英勇傳

稲川治部太夫源義基

駿河守義基、清和源氏にして駿遠兩州の
太守なり。比類多し、猛將として街道二の大身多し。バ
武威近國に輝き、二万余騎の大軍を卒として
上洛せんと、自國を打立、東海道を押行
形容最目、さきくろくろく、

豈てうろくや、尾州の大多春永
未僅ふ三郡を領す、頃小勢を
以て止鳴海の街に争戦多す
猿吉郎に進み、依春永不意に
間道より押寄、義基が本陣を
窺、空居ふ切入るべし、今防戦
うゑ、はてして捕獲、問ふ陣没なり
まひぬ、或は此敗戦、兄様、の所、離れ、の
怨恨の祟なり、処とて、一説あり

一家略傳史

柳下亭

種員記



一勇齋
國士方画

交

稲川治部太夫源義基

(Inagawa Jibu-no-Tayu Minamoto no Yoshimoto)

太平記英男傳

稲上代九郎正忠

佐藤家之勇臣なり主君を虎之助とて
江州名賀濱の地巡見の時節兩人の浪士が闘争
するを見て制止の我臣下と云ふ則ち村政藏
稲上代九郎の二人是より然る後正清に従て
戦場へ往来する國々に功名を顯す殊四国の
戦九州の軍へ強敵を敗て諸人の耳目を驚
且異国の役へ蔚山の北より島山の岩を守り
明の大將李の春副將解生等を四万余人の
大軍よりりて稲麻竹葦と取圍と物の
数をもせし計て釣懸へ鳥銃を打てば或
大木大石を投落しふより勇敵の軍勢足並
四度路に漂を見すは城門より押開き退兵
勝て三百余騎目ふ余大軍の中面より
突入四方へ面を難く廻り寄手何条と云ふ
べき和兵の爲め切られんを恐れぬ
て敗走るは正忠烈く勢を
するを捕るは夥しく
輕く軍を引あげて此日
敵を討取し千余人と云
主君斯く其功を賞と
止るべしと云ふ

家畧傳史

柳下亭種員記



一勇齋
國五方画

星

稲上大九郎正忠
(Inaue Daikyuro Masatada)

太平記英勇傳

石川壯助貞和

貞和上方勢の内賊を
峯三振太刀之人として
人免せし勇士ありしが
彼所の合戦は大将の命は
依て北国勢の追討を三度
の太刀と振振當り幸難で廻つに
此太刀先に向ふ者命と看ふに
いふところ爰敵の隊將合郷基左門
味方の難戦と引揚へんと駈けつる
端々も貞和は行合互にそれと名乗
りい戦吏数合ありと未勝負も決せ
ざりしに合郷の良等なる長柄組之
勇士斯と見ては驛を走り来て
貞和の中に取籠声と合て突
つゝ貞和と勇士と争ひ合ひ
ゝゝゝ八方の勇士と争ひ敵
ゝゝゝ竟ふ此所ふ討死ありと
通々き双士たり斯く大将中浦ハ
貞和の討死と甚惜み軍散とて後念
頂小吊いゝめいゝゝかん

二家略傳史
柳下亭種員記



石川莊助貞和
(Ishikawa Sosuke Sadakazu)

太平記英勇傳

井曾野丹波守貞正

井曾野貞正、浅井家の幕下にして、江州佐和山の城主。勇猛絶倫の強將。姉川の戦、小手勢勝て三千余人、長蛇小備、十二段小配。大多家の陣と遙小眺、誰人もんとや中央より、赤地に金の以て押し、窠の紋の旗の下に在る春永とを目掃敵。奴原打散し、只旗本、突入やと一處塵を振る。勢恰落龍の昇天するより、以て大多家の先陣、笹井右近が三千余人、小銃炮と打ち、煙の内に鎗入。瞬間、突入し、三陣、幹惣三郎が三千余人、押し難く、是より打拂ひ、三陣、蜂谷兵庫頭、四庫宅、五庫、左尉、茂林三左。

討破既ふ春永の本陣に近づき、彌勇の多を顕し押
つゝんとて、いづれに遠服備ふ、金の馬印を動かして、兼て
合國を期する中浦を、勇兵前後左右より起立先刻より戦勞
井曾野の勢を取圍み、余りのとて、操を以て丹波守を軍卒とて散ちりちり立
直正勇ありといふも、味方小引られ、思はば後陣に退き、併ある井曾野小
わらず、名ふれ、大なる堅陣と云段、遂に破変かたなり、於後大多家に降参る
ちの故、わけて異國に渡其終所とて、いふとをん

一家略傳史
柳下亭種員記

三勇齋
國士方惠

灸

井曾野丹波守貞正
(Isono Tanba-no-Kami Sadamasa)



木戸宅左衛門長近
(Kido Takuzemon Nagachika)

太平記英勇傳

小綾川左門佐高兼

中國之太守郡音成の次男其先
左工門大夫と号ひ音成の器量
と受継智勇拔群なり父と
共み宮島の合戦み陶全妻と
討しつゝ從來高名拔萃
以後是に従ふ軍功
數々度々依て筑
前一國を領し三議に
叙し中納言に任じられ
異國在陣の頃ハ殊老練
場教ふる故諸軍儀有
先高兼の異見と聞
彼地の軍勢と引揚るに及んで
衆人の評議區々るも高兼ハ
只一言に依て忽決定し
其智凡慮と過るも如此壽を以て
領國に終最愛と大將といひつ

一家略傳史

柳下亭種員記



一
國
五
万
画

小綾川左工門佐高兼

(Koayakawa Saemon-no-Suke Takakane)

太平記英勇傳

松永大膳久英

元來松永久英、山城國西田の農民なり。其性聰明、農利曾奇、藤
 同三も當所の産松並正九郎と呼ぶ油買人あり。運ふ棄てて美濃の
 国主なるを、彼を傲とて苗字を松永と更り、三好長慶の
 仕意に執職する。長慶死後、其子河内守と毒殺して
 左京太補、又次と以家と繼り將軍美昭を奉り
 又春永を参りて主人、又次と害する杯、森惡
 牧奉りて斯て伊智山の押して摂州
 天王寺の附城、不定番、しが俄に
 叛逆の色と顯大和国志貴山の居
 城、小柳、春永、中浦、計吏と殘
 順貞と先手、大軍と以て攻寄る
 然るに、當城、近国無双の要害と
 いひ老功手練の久英、千余の運兵、を
 籠りて容易落さざりしを、城内の
 變心の者ありて、陳所、火とて、敵を引合はせ、防戦
 するひ、年來秘藏せし平如と銘せし釜と敵の
 手に渡らんも、残念ありしを、打破、切腹するを、嫡子、小次郎
 春之首と討て、是と抱き、火中に飛入り
 死するなり。實惡報如此。

一家略傳史

柳下亭種員記

一軍齋
 國士方馬
 大膳



松永大膳久秀
 (Matsunaga Daizen Hisahide)

太平記英勇傳

毛受惣助家照

一國一萬馬
國一萬馬

毛受惣助千場田之近臣。春日江州長島。一揆討時。故有。且
軍。引揚。當家第之。功。臣。千場田辰家。と。殿。定。擲。引。ひ。く。櫓。か
一。揆。は。是。を。見。て。す。や。敵。の。引。揚。を。追。廻。て。討。取。入。方。う。取。圖。辰。家
勇。猛。絶。倫。な。れ。ば。切。散。追。拂。大。田。川。追。来。所。ふ。無。て。手。配。や。あ。ら。う。う。早。舟
五。全。艘。川。上。に。押。登。千。場。田。勢。の。直。中。鉦。を。鑼。也。と。打。撞。あ。ら。う。う
矢。に。辰。家。勢。も。右。往。左。往。に。敗。走。る。此。時。へ。く。あ。ら。う。う
千。場。田。金。の。幣。束。の。馬。印。を。敵。の。爲。に。奪。れ。る。一。揆。の。中。う
山。藤。太。夫。と。う。者。此。馬。印。と。高。く。差。上。辰。家。を。首
討。取。と。う。呼。れ。一。同。ふ。手。と。う。く。あ。ら。う。う。千。場。田
牙。と。嚙。て。鬚。を。返。し。あ。ら。う。と。惣。助。押。上。じ。お。任。玉。と
袖。印。と。あ。ら。う。う。一。揆。の。中。紛。入。藤。太。夫。の。近。臣
一。か。切。格。彼。馬。印。を。奪。返。味。方。の。陣。走
来。と。敵。百。餘。許。追。来。惣。助。片。手。抛。ふ
十。余。人。切。倒。せ。此。来。喜。お。世。に
安。辰。家。前。ふ。持。来。喜。お。世。に
一。字。と。與。家。照。と。名。乗
日。頃。ふ。十。倍。せ。う。後。年。辰
家。北。之。庄。と。久。吉。爲。軍
難。美。ら。う。時。千。場。田。と。名。乗
と。敵。と。謀。主。と。安。く。居。城。お。入
の。所。も。去。け。陣。没。は。し。う。昔。辰
忠。信。が。吉。野。お。君。の。名。と。賜。り。郵。官。殿。の
落。し。す。わ。せ。と。れ。れ。も。増。じ。行。い
譚。の。べ

一家略傳史
柳下亭種員記



毛受想助家照
(Menju Sosuke Ieteru)

太平記英勇傳

一家略傳史
柳下亭種員記

永村文荷齋道家

智兼田辰家老臣文武の功者辰家勢を
北の京自親の折々年来主君春永
より拜領する種々の重器緒の
類は床の間に堆積するに其様
吉野の春竜田の秋と目くら
とあり其中に燕梨子と号し
青磁の花入より辰家は是を手取
いふ文荷齋此一品主君殊に愛多
名譽あり己の賜なりと大國と
思召は仰れり今其古に与ふ大
せと言つ差出られ文荷齋は頂
座をきき床の柱に打當てて
辰家斯くを莞尔笑わぬ我共
極くふらふ辰家の酒宴せん
破曉に至る辰家今辰家の時
字に換切て文荷齋介錯せし
首討落し内室の死骸あり其
御供を血の引み極下の
傍に置く折々時鳥の
を高くさかす



國士方画

里 灸

永村文荷齋道家

(Nagamura Bunkasai Michi'ie)

太平記英勇傳

一ノ瀬帝
國書万巻

中浦猿吉郎久吉

此人是凡う天の爲る高運ふと尾州天知郡の民家
生推時父賣人の小奴小せんそ其家小送ふ一月を經たて
戻る事屢あり壯年及び二度駿州稻川家の臣増下氏
の僕子と成大志と懷て三面の大黒天と破碎太多家小仕て
智略と施戦功限う春永重と奉用て竟中國の
探題小補らる彼國の軍半ありと上方の山奥に
さう急勢と引返して洛南山崎に
君侯の世を報北國
小谷小強敵の
十場田

亡は是より威勢
強大とつて撃
破次々勝秋津洲と
平定て宣馬と稱
す度海八箇道を
押其身卑賤より起て極官小登庸也
勇威と海外小震実の開闢未曾有の將とて
一家略傳史
柳下亭種員記



中浦猿吉郎久吉

(Nakaura Sarukichiro Hisayoshi)

太平記英勇傳

根来小水茶

紀伊国海部郡根来寺の僧なり意知山小梅菴に往たり怪力
 限あり長一丈八角に削り條鎌入る棒と得物とあり
 群敵を打掛いさる漢土の呂布和朝義秀が有様と
 目前に見えど春永家の隊将お毎度其働と心
 悪く思ひ面々に討取んとせしは是が勝る
 者更には佐藤家の勇臣志村政藏頼上
 代九郎おと相討り中に取籠息もつ
 せし戦へ政藏と馬より落し討
 んとつけ入所志村を 無双の勇士
 うれ々落されし小水茶の馬の
 足とむさし突小水茶馬上の
 得に真さるるに落されを
 政藏手早くおさし
 も名勇猛

無双の勇士
 小水茶うれを競ふ

政藏が為討死
 実お目さるるも豪傑なり

一家畧傳史
 柳下亭種員記



根来小水茶
 (Negoro no Komizucha)

太平記英勇傳

大多上總介平春永公

桓武天皇之後胤平相國清盛の末葉
 大多備後守春秀の男上総介平春永ハ
 其先尾州に僅し領あり今知太才ありて
 同國の産田浦猿之助と抱てり故軍配
 一國に於てハ大敵稱し其基に桶狭間の戦ふ
 破美濃國に亂入し齊藤氏與討て巨利
 家扶て佐太永根に追三好の剛敵を
 碎其外勢州に發向る安濃神戶
 之降尾濃の兩國に鎮無帝都
 の守護より安濃を毎内を震
 既正位右大臣に任す且て江州安
 乳の新城に基勅使を請る事
 ゐく家臣高智道秀の懇志
 の役を命りれり道秀金銀美麗と
 尽く其席とすけに己が家の紋と添し幕と
 彼所を張春永贊の過るく仲の幕の雨事と
 以太清景と取て散々ふ引破危從て道秀の
 面とせり此他故わつく高智と憎し甚く好深恨
 奉り竟て道意と全京都の条通の佛地ふかく道秀が
 爲み弑せられぬ 一家略傳史

柳下亭種員記



大多上総介平春永公
 (Ohta Kazusakaihei no Harunagako)

太平記英勇傳

織尾茂助

安春

織尾安春中浦
後吉郎殿跡の臣
大多智水濃州の斎藤家
と攻む時後吉郎密に斎藤家
木城縮平上の筋手より手合街道と
越ふ地理を言ふ更與ていそと逢の谷
向く人あらず人伏し形わう人幸しく
彼所至り壯年の男身は襦袢の衣を着
猪籠を側へ掛け持てて猪籠組山が
以判殺し其公殺するを後吉
郎主従立寄二滴の水もあらずこれ用
意の爲に携来し瓢の酒を只灑ぎ
茶釜の茶を興へてふか抱き漸く
息をとり其所以を尋ふ先年て大多
家の一族より尾州岩倉の城主大多七郎重門
信成の老臣織尾長右衛門安勝が二子
といふ王家滅ぶの後此中に非違入
り身は重なる時節に計事をいへり後
吉郎殿跡則大多の家に入りて斎藤
家の事を語り真に茂助と案内と
安々揃手より忍入一時に城を誼め所
後後吉郎と更に主従の盟を結ぶ
合戦は馬名駒の竜小帯の先生といふ
遠州とて数万貫を領し

一家畧傳史
柳下亭種員記



一丁齋
國子方画

織尾茂助安春
(Orio Mosuke Yasuharu)

太平記英勇傳

佐田陸奥守有正

佐田有正、無双の勇將、其性短慮大膽、中々、太多春永に仕て、千場田辰家の旗下に属す。

北國所々々

戦功多く、早良ヶ越の壺中へ渡り、諸人の耳に事々せ、辰家北庄に逃亡の隙より、篠吉郎に随従し、越中へ領彼國神通川の辺へ、怒に仕て、愛妾小百合といふ者を提切て、其怨恨彼地へ、怪異と爲て、神通川の夫羅刹火といふ、今も世人の怪談と爲り、且て、篠吉郎有正を勇烈と愛し、肥後國熊本之城主といひ、數十方貫と與へ、領地を生、黒百合と奉り、東或國中不政とて、一揆の動亂屢うしに、依忽に死し、賜家名永く断絶は、是併々、小百合は、怨是の報ゆなりと云ふ。

一家略傳史 柳下亭種員記



一勇斎
國士方馬
結

交

佐田陸奥守有正
(Sada Mutsu-no-Kami Arimasa)

太平記英勇傳

菜藤内藏之進年員

一家略傳史

柳下亭種員記

一軍密
國五方
萬



主仇有前白双空 殺身曝報君公
可憐晋國刺衣客 共感生匪一夢中
比の是乃くひ

菜藤内藏之進年員
(Saito Kuranoshin Toshikazu)

太平記英勇傳

菜藤利基入道立本

一冊

國書

萬巻

吳

藤原正清が功臣なり元來道秀が勇臣なり武名諸國の異き菜藤
内蔵之助が嫡子なり君父俱亡いて後故ありて正清が仕へ四國の合戦
九州の軍其外諸國の魁として戦功更けつゝ異國の役へ渡海し
大将正清と俱に遠く元良哈が責入彼所の諸城を陥つゝ一城手
強く支つゝあり當城中に蓄つゝ敵の身の丈八尺余りありて
虎髯針と植ゝ手に
鮮として毎度先登かすむ
其力量幾許と知らず和國の軍
勢と勝つゝ其立本無き此者
と討取ん心げり或曰く軍の端
々出會勇と震えを戦ふ形勢
いづ果べりともえんがけり後組が
とろろと引組あがら堀の中へ搏い
落双方龍虎の豪傑なれ水の底へと
暫く捻合竟ふ彼が首を打取て勇々
と水中へ出上りて如何
なる鬼神も敵がけり形勢もど
んどんと斯て正清立本の武
勇と稱し威称限り多しと云ん

一家畧傳史

柳下亭種員記



菜藤利基入道立本
(Saito Toshimoto Nyudo Ryuhon)

太平記英勇傳

菜藤右兵衛太夫勝興

美濃守義勝が長男濃州の國主
より一年太多春永當國ふ軍馬を
向諸臣又智勇を盡しと攻撃をたに
西美濃の三人衆と稱し菜藤家の手
足の如くし氏并安當宿座の人々を
忽春永の旗下の降み猶此外の面をも
或降参又ハ陣没支戰者更にし
春永の臣下奇計と施者あつて手勢
を率て菜藤家の本城稲葉山の向
道に分登り獨手より忍び二三之丸を
攻落るに防戦争叶ふべき城を削て退去
を越前ふ至り淺久良家に
食客より義無も春永
の爲ふか根ふ敗軍一合斯く見え
るが勝負心か思ひたる此國を退て又
何國か飄泊せんや然死と潔くせんか主従
僅十余人氏并左京亮が三百余人の中切て入
二三度四五度追度し身も鎧石かあつたれは
淨手淺手殺す所蒙り今早是をぞと
鎧脱捨腹強切從者も各指違々々
主従共ふか根山の初冬の落葉と散失る

一家略傳史

柳下亭種員記



菜藤右兵衛太夫勝興

(Saito Uhyo-no-Tayu Katsuoki)

太平記英勇傳

菜藤山城守秀龍入道乗三

美濃國主菜藤乗三其先洛外西の岡々油買人
松成勝九郎と号天性の美少年と云ふ十七歳にして
濃州稲葉山の城主菜藤入道明舜の仕下
るに煩智略の多き明舜秘藏眼と
追て出頭して長井親九郎秀龍と
名乗時ふ明舜病余卒一家の
嗣を承けし新九郎智と施
して自稻葉山の城主とす
菜藤山城守改め是より
親張大と云う登喜頼範
と逐て其領地とある濃州
一郡と平谷は後難髪と乗三
と号曾て大春永永と云ふ家
しむ然るに春永行跡と云ふ
種々の風説ありをたむ我
輩とすん及ず乗三亡領地を
奪へし其其様と見えんと濃
州富田の法正寺とて對面あり
しにひまらふ小春永領掌とて彼所
不至りしふ其行粧の異風あり
乗三垣内見て密にそのむを春永吃と見送り
たれば大驚き先づ法正寺に至り待て以て前替烏帽子
素絶お着し之威嚴堂々と坐ありし乗三素不相違て同席ふ
通う相対するに春永のやうに今方途中とて我々を伺ひ見笑ひ曲者ふ
似たりしとてと作られ心中大に恐れ斯服力とてさきも実とて異とて
天晴の大將とて我子孫傳ふと馬と繫べし思ふ果して是見明やと
竟ふ大多く為ふ亡れぬ乗三我嫡子義龍と不和やく事ふ害せられ
一家略傳史

柳下亭種員記



一三軍齋
國子方画

四
灸

菜藤山城守秀龍入道乗三
(Saito Yamashiro-no-Kami Hidetatsu Nyudo Josan)

太平記英勇傳

一勇齋
國士万画

左馬之助藤原保明

利仁將軍の余裔江州の産して前名孫べと号

祖先
名々
民間

沉落せし保明

無き武士とせん

と心ふ望若冠の頂同國安ん

来て主君とせんと欲す且て或日

暴馬と衆止るとあり同姓佐藤

何某思と試認其業の達せと

感し養子とるは斯とて漸々美名

榮し竟し真紫家一個の督將とて此頂諸国

將士許多の中沈勇左馬助と及ぶ者ありしを去程

異国に伐つ船卒と令り唐島港の船軍に比類なき大功

顯し勇威異邦に事事恰鳴雷のじ東奥會津に數十

万貫を領し自國に卒に

一家畧傳史

柳下亭種員記



左馬之助藤原保明

(Sama-no-Suke Fujiwara no Yasuakira)

太平記英勇傳 笹井久藏

尚保

一家略傳史
柳下亭
種員記

尚保右近尚直の嫡子なり十三才と初陣の時建部源入郎といふ
大強のとき計春水殿を感状を賜て自ら戦場毎に手柄と頭す
阿根川の戦は笹井久藏陣より機野丹波守を為に切崩され
安んと思ふ所無しとて軍を率へて赤尾美作守をえり教部被
し乱軍とて及て敵の旗本を襲へて是を五千余と勝て久藏尚
保真先とて自身千余の鎧と取長政の本陣切へる旗本の
面を割て我を勇無双の若武者とせられ右に突きて
暫時の間千余の敵千人を長政の前二反
と名乗る



一三市齋
國了廿五
癸

十二 炎

笹井久藏尚保
(Sasai Kyuzo Masayasu)

太平記英勇傳

笹井右近尚直

笹井尚直、久藏尚保の父なり

一
三
國
二
十
五
年

太多家の良臣なり、春永、淺井朝倉とは、叡山の麓に對陣す。二月、余り越前より、胡へ積來朝倉家の兵糧米堅田浦に積置る。右近尚直是を率え、敵の糧米を奪んと堅田の住人猪飼甚助、馬場孫次郎等と案内者とし、手勢五百余人、密に船を取乘て堅田浦に押渡り、夜半、もろもろの項、突と揚ぐ。切立、朝倉家の番兵等、思設の更なれば、皆散る。逃失く。これ、右近の心、終に糧米と船を積、春永の本陣に送り、我身の乗る船あり。と、再廻掉し、待所、先か逃去。兵卒等が生に依て、淺井朝倉兩家の軍勢五千余騎、兵

船數艘漕連、直、浦に打ち上り、勢の笹井と取違ひ、微塵かせんと探立、右近、軍勢勇ましく、いとも外に助の兵、あつた、悉討死す。尚直も、今、是迄を、腹機切て果し、

一家略傳史 柳下其種員記



笹井右近尚道
(Sasai Ukon Masanao)

太平記英勇傳

志村政藏勝豊

佐藤正清の勇臣あり未虎之助とて時主君の領地
 江州長濱巡見の折より二人の浪士が闘争と止り是れ我が家人と
 多良一人稻上代九郎一人則此志村政藏あり代九郎直ふ
 正清に従ひ行政蔵の母の病中よりそ一旦家小帰りぬ
 斯て程より大多阿佐井の両家阿根川小合戦の初老母
 死しと幾程もわたり此戦の手合へんと身素
 肥ちたり阿佐井の旗下の勇将伊曾野丹波守の勢の
 後より馳入る人多勢を打ちて敵味方の目と驚ふ
 是志村が奉公初め夫より所々の合戦に軍功
 多く後年諸大将九州在陣の時節豊前国
 毛谷村の産あり六助と言ふ快力の者と諸
 将の勇臣おと番三十六番の相撲有る
 悉く彼の勝事と見れば政藏終小出て是
 勝負に佐藤の臣とあり比田孫兵衛是
 是韓國の戦より所々小軍忠もやう事
 彼地の大将季將軍元豪が春門の辺に伏兵ありとて
 打破りて数方の敵と切るにけ異國の
 名を重んず

一家略傳史

柳下亭種員記

一ツ男
 國々万画



志村政藏勝豊
 (Shimura Masazo Katsutoyo)

太平記英勇傳

品之佐近朝行

大和國主建中順貞の智臣なり其主順貞無て登喜と断金
 の因りて後我の心實に味方なり事と
 頼む順貞運を計て河を越し佐近朝行を以て金崎
 の陣に使者を遣ひ使地に至り大將中浦に遇て告ぐ
 登喜無て主へ順貞入魂と云ふ此度の合戦は味方
 と云ふ今も争運に力仕らん君御出馬に候
 順貞其時手勢を以て登喜を旗本へ切入申す由言上
 の為某を使節とて是處に懸懸に來り惣大將も
 大和勢の連る萬全に察しあつて態と言ひのせしめ
 順貞厚志深く感心せり汝の名はよく佐近朝行
 ありと率に出物せし白柄銀の經巻と長刀
 一振と與へ彼所へ合戦の折柄此長刀を以て逆徒と
 討て高名せよと云ふに朝行面目を施し
 件の一振と携て河を越し陣所に候順貞に斯と
 告ぐたり既而渡堤に合戦の刻登喜が勇臣
 兼藤代へ即順貞の本陣へ切込大將順貞危
 かりと佐近朝行傍にあつて彼を食止此長刀を
 以て代へ郎と討取比類なき手振と顯たり後故
 むて順貞と退身し江州佐和山の城主何某
 佐近朝行を褒めし名を後世に止る

一家略傳史

柳下亭種員記



品之左近朝行
 (Shinano Sakon Tomoyuki)

太平記英勇傳

四王連左司馬頭
政高

登喜の家臣勇猛無双之士也主命によりて
呼石谷大と海共七十余人の英卒を勝り
豊民の道達する様になり一擲千金崎西の
宮の往還に伏兵し敵將の中國より来
返一来るを待滞し小案小こがまを
只一騎清軍に先立此所かきりりそれ
と見るより引色を討取んとるはか
敵將少し驚色なく一鞭うれて敵の
頭上へ越越略道を経て廣應寺
といふ梵刹の門前に馳込
四王連降る運来る以見く
乗る馬の尻のいのあつりや
二刀を切て政高が方と向て
旋一それを従来細き畔な
れ四王連行に道々大に
怒て馬の前足と引被深田の
中へうこお入寺内へて飛
々々高連即知の大將を
怒寺僧の形が身とを基所に居給ひ
政高馬とを無再門前に出た端無も佐藤虎之助が
驅附ふ行合ふ互に名乗て戦ふ双方聞ゆ勇勇なれ左右前後
遠近より手鎌大き勇士の戦暫く時を移し断る飛トいご組人
と双方一度に太刀技力九力を出しと無手と組土砂と踏立争し勇力
無双の政高なれと運命らふふりや竟ふ正清が敵小討死と遂
ぐりたり

一家畧傳史
柳下亭種員記



一
國
十
萬
馬

先
炎

四王連左可馬頭政高
(Shioren Sajima-no-Kami Masataka)

鈴智飛驒守重行

紀伊國名草郡雜賀の地土孫兵衛が兵書と
胸中がくくく不可思議の光如來の仏眼を頼ん
爲て、攝州意知山の地へ来て諸卒を指揮するが
及て、火の如く猛將の大多春長の太軍
と引清是と破事數度僧徒等と烏合
勢ありき。以て十年の闘戦に聊敗と
し、我軍守軍配に依りてなり
理哉此重行其智諸將孔明と肺腑肝
心分へて討正成。智囊をくくく等に
勇々苗儀の牛と親衛の船に
負ひ勝つ。曾我衛に至妙なるゆゑを
或時、苗騎野に埋伏して敵將春長
と狙撃する計。或時、明智無及の中浦と
陣と布て牛馬の戦ひをする。要智重
絶倫の働き。故春長弥憤と増彼地を
陷其輩を塵とせん。なる重行斯と
察智く上人と奉り諸卒と
助命事自己一身ありと思ひ、極の仏地を離て
西成郡南岡へ出張なり。態と敵徒の大軍より
思ひ小取圍に入る。撃血戦なり。所も苗軍又
く比類なき名と後世止む是より漸春長の憤
最と意知山と和睦とのいさゝ嗚呼重行此智勇
と以て生涯一國の主なるなり。其実得妻はたふ
在との古語も能く哉



鈴知飛騨守重行
(Suzuchi Hida-no-Kami Shigeyuki)

太平記英勇傳

宅間玄蕃允守益

守益、大寺春永の元老千葉田原家の
の從子なり其性猛勇烈火の如く
て八貫目、鎧杖と重なるに戦場
向ふ敵の總用と合する事ありや
大寺の夜討み無敵の勇將赤八代
討取現ヶ峯の乱軍み敵將と相討
せし間近く進みたる天助高軍
衆み及んや後吉郎眼光大く
衆馬進無本意と遠事とん
畏其る味方の勢とく討死
從軍する先辰家の本城み至
一手に敵軍の取辱と雪し北庄
至するみ敵其途中と取切られ間
道みんと山深く分入み兵衆
無き盡た木の實と食草の葉とみ
食し里近くいづた後吉郎と重臣
等み端無し行人み彼者宅間
守益とみ八方より取包と守益、勇と
敵の戦場も戦方とくみ食
事殺刻られは敵衆み哀れ
生捕とみたり大強の勇士とみ
府邊の領所とみ

一家略傳史

柳下亭種員筆記



宅間玄蕃允守益

(Takuma Genba-no-Jo Morimasu)

太平記英勇傳

丹部侍従平春高

太多春永の三男母尾張國人坂氏の女より父の命に依り丹部の家と相續るに
 御父都の夢の後淀堤の吊合戦にかりきれば足春雄とこそを己とを
 國家の主とて思ひふ左にされ憤りお退け知葉田竜川等と
 離し合せ居城岐阜に旗揚げ春雄を初め拒む者と打ち合ふと
 企つゝ敵將疾も是と知り軍勢を二手に分け一手は岐阜
 の城と遠巻き一手を竜川々竈とて勢州鹽江
 の城と攻め
 くと春高

急使に北国
を遣へ辰
家の後詰と乞ふも雪深く
軍馬と出れとありけり斯く竜川
に蟹江の城を攻落され知葉田は
越前北の庄にて討死なり勢ひ
衰へて一々寄手小和と乞ひ城と
開く尾州野間の宇津海より大和堂寺にお到りし春雄が軍勢
迫り来ると竟お自殺し失玉ひね時小生年二十六歳とぞおのりたる

一家略傳史

柳下亭種員記

一
萬壽
國
廿萬

三十九

丹部侍従平春高

(Tanbe Jijuhira no Harutaka)

太平記英勇傳

建中官兵衛重治

建中重治其先美濃の國主齋藤家の旗下一つと文武
兩道秀猿吉郎未小身なり時春水美濃を征伐の節
彼地を越重治と説く大家家小降一ひ斯く

後猿吉郎歿し師に任

軍吏ハ建中ハ

談佐藤吹島

加田桐折尾其

他中浦牧野

臣志建中軍事の

門弟ハ侍吉郎漸小身

ハ中國の器と蒙り彼地趣ハ

乃重治も同伴ハ播磨平方陣ハ

在ハ老病費ハ勝ハ猿吉郎驚歎

多人ハ亦言ハ登陸手ハ尽コトモ其險

コトハ時ハ重治傍ハ者ハハ九士ハ老軍陣ハ死スルコト

本意ハ我ハ再平山陣中侍ハ故地ハ下ハ猿吉郎寢食ハ忘テ

昼夜ハ抱テ死セリト云ハ重治既末期ハ及ハ猿吉郎ハ様々遺言

卒ニ及一期ト云ハ陣中ハ没ナリハ齋藤家ト云ハハ自己ハ看計

ハ中ハ終ハハ故三國ハ益庶ハ行ハ勢繁ナリ

一家略傳史

柳下亭種員記
一勇帝
國了廿万馬



五 灸

建中官兵衛重治
(Tatenaka Kanbei Shigeharu)

太平記英勇傳

辰川左近勝政

辰川勝政元來江州佐木家の臣多し
故ありて主家と退去し武道修行し諸國と
經歷なり尾州に來て多家に隨身す
其智勇衆小秀て一度春永小
計重と奉て勢州蟹江の新城
と築き傳謀計と以て同
國衆名の城主伊勢三郎
氏善と追其城と乘取
斯てより戦功數度あり
て春永諸國と平治
す

又て勝政と関 東管領と
春永都山変の後千葉田辰家と心と
謀る吉と挾討とるは是則辰川千葉田の
妹聲といひ其上勝政は春永第三子大多春高
の舅なり春高とて大多の家と継ぎん
との故に其計を悉く語る言為ふ
勢州小陣没なり
一家畧傳史
柳下亭種員記

一三
國
文
庫

三
文
庫



辰川左近勝政

(Tatsukawa Sakon Katsumasa)

登喜十郎左門

光隣

道秀の一族を丹州福地山の城主より定規の合戦竟に敵方の勝利をう軍散して後久吉首実検をせんとす終日の戦ひ討死する両陣の尸墨々として丘のほとり本陣の辺より死骸と先取捨下とを雑兵等立ち傍に引退する中へ怪へ一森者ありて忽ち起り短刀を以て久吉を目を飛りて側におる加田切捨作且元主君の大事と駈塞鎧を絞て突んとる光隣に奇て持つ短刀投捨つ太刀拔く大音と登喜十郎左門光隣此所へ伏て敵將を待り首を渡せと呼張て勢猛く切てうろと加田切一世の勇を震ひ人交せに戦へ面々に堅唾を各人屏風と立て見物あり光隣の運や極りある加田切大喝して突出し鎧の肩口深く串れ漂ひあらずも手練の勇者捨作の鎧を片手を切りか切折し初めの痛半ふ刀法乱れ竟に加田切の為か陣没なりと通勇々も豪傑とをりしを

一家略傳史 柳下亭種員記

太平記英勇傳

一ツ軍力帝國



登喜十郎左門光隣
(Toki Jurozaemon Mitsuchika)

太平記英勇傳

登喜氏

濃州の産若冠より所々小流浪多す名諸国の地理城壘
 究すといふ所は斯く大少仕るゝ及て春長軍馬を出しこ
 先登喜とて敵国の強弱地理の模様を向う色而て後足と
 攻め極て百戦百勝より抑當家仕より軍忠と抽て救拳
 する小遠就中丹州征伐よりあつて秦野兄弟が爲め老母を賞
 じて斬戮せられ赤井一族と對陣して金宗難戦は百折千戸
 一と竟小一國を平定るに春長其功を賞し山陰道龜山江州
 高木兩城を無帶しく数万貫の主とし後主君の目か
 違ふを惡うと尤やじ其所以るにわが姫藏丸領
 地の所望とくけさる春長が元且の夢悉く
 登喜が爲に火とらる或人前か打擲せし
 或陣中小罵辱らる太程小情思惟る手と
 束て自滅と待より不如春長殿を害せんふと
 心を決せし無双の猛將たれ容易に事を計るこ
 肺肝を推て中国加勢の由と陣解は居城龜山より勢を
 發て愛宕山小取登り眼下に見る主君の旅館四糸の
 佛地か押寄て直ふ城しとてまつり帝都小旗を翻一時
 懾怖を散せし其身も又幾程あくる中浦軍略よりて淀堤の
 一戦利を失ひ洛外の竹藪かおとく命を没しぬ

一家略傳史
 柳下亭種員記



九
 灸

登喜氏
 (Toki Uji)

太平記英勇傳

槌井大和守入道順貞

元來大和國三郡の領主として品之左近増倉右近といふ羽翼の臣ありて武備尤嚴なり曾て山陰道龜山の城主登喜と奮闘し其主君春長を申越せんとて大勢の旗を下しむ斯く其先鋒に進み荒樹村を擧げ伊丹の墨と拔松永久英が和州志貴の城を破り意知山の押とありて數万騎と對陣して聊も臆する者なく武威即ち増長をば春長順貞といふ大和國の主とす斯て登喜四余の佛地ありて主君を弒し奉り頃和州の使者と遣ていなりや日頃の讎憤難止春長殿と詠取畢ぬ昔君年來の因と思ひて此度の合戦小助力とつづきいへ戦功の後奮領大和の外二國を併て是を領せしむ即相違ありとの誓ありとて已四男小黄金許すとあらう入道に決定せし諸臣の異見も區なり時小品之左近友行進出其返答すといへ使者に對面し仰の趣を承知仕御方相違ありといひ從來断金の交渉人質小及やと黄金諸共送り返す即時小万余騎の軍勢を催し順貞自身是と率て登喜を敵軍と戦場を約せし定堤の彼方より洞ヶ峠に出張る一軍を計てせよと既し登喜が軍利を失が及で越軍山を操下し其旗幟一切に入道討ちて共小勝利をせんことぞ帥の京童の口さかると是より順貞といふ揮名を日和鏡の法師と号しとらん 一家略傳史

柳下亭種員記

一國の帝
國の帝
國の帝




廿
灸

槌井大和守入道順貞
(Tsuchii Yamato-no-Kami Nyudo Juntei)

勇士左馬之助光晴

光晴、其先父守部と曰く元より武術に飛躍して、
 官軍の臣として諸々の戦場に知略を施し功名校率なり
 七世、昭々たる春水の旅館四谷の仙地押寄一時節も
 光晴意大將の命を受命忠州の藩り要志の召城で黄ひて
 も城兵は死の窮めに震れて敵一是と云ふも責無きこと
 光晴此休を見て上平下智石等火使と從て城城中へ入る
 斯う敵將中浦登喜は是ばかり對戰の如く光晴と勢の押とて主の本威高本
 の城に攻めし然る味方と雖一堀井八通將軍山と霧下主君の旗本押
 り用意之災の合戦味方破れとの囂言をたぬ主君の陣涙を流さるる
 究竟の定兵と勝つ迄とて駈向ふ所出づ獨りの端無敵の大軍に
 去る古今英傑の光晴され僅の罪をせん九に備自敵中切て入
 突果一移築られ此戦六野臣林丹四郎お任せ
 其身又高木兼人と鍋水と渡り此景は惜も飛
 鳥の延すにこれ敵勢同く季ある
 鳴を止らう斯て光晴難う高本
 城城ろ珍宝鎧を取出し敵の
 兵を待たに富み敵の大軍高本の
 勢十連重を取囲此時光晴擔ふ
 上城外と云ふ何ぞ城の下に武者二人顯れ居る光晴
 是とて何故と尋ね敵の一番射入は何斯と答ふれ
 光晴大は笑ひ下と今討取易いとも其へと有
 地方へ觀金の因われ敢て下と敵うけに受の判決を解輕
 南金とわづかれ八紅の中左馬之助の仁に春殿を導て此場
 取りおわり家手の軍勢現合戦を始めん此時城中にて王徒快
 自害せんと申用意と成りくる斯て光晴矢倉の上に大音を申
 相手の隙將と言ひて吏のわがやハ左馬之助光晴と近く此を見察あれ
 呼れハ光將姫際馬と寄何吏の公を々と大音を言ふれ光晴の旨今此ふ
 於て巨響と轟かざることには春殿がより所持の珍宝鎧を御城に秘置する
 千歳の勲章を我々に失却せん是に依て目録に相添其御陣送りませう
 いふ此語聽大將疑ひ誰かを挟まざるべきならんて鎧を脱ぎ宝物矢倉に入り
 わる家手の隙將感涙と流りわれば多の光晴裁ち惣大將の前委細言上
 交ふ愈いと領て幾多の宝益を請取軍使といて献する惣大將ハ光晴が心底
 感激し光晴今何も平易にと主従軍期の神宴なる皆自害と果して
 突ふも惜き英雄なる感動なるのをとるなり



A detailed illustration of Mitsunori Muroyama, a samurai warrior. He is depicted from the chest up, wearing traditional armor with blue and white elements. He has a prominent black mustache and a goatee. His head is covered by a tall, black, conical helmet (kabuto) with a silver band. He is looking slightly downwards and to his right with a serious expression.



勇士左馬之助光晴
(Yushi Sama-no-Suke Mitsuharu)

